投資家が パパとママに伝えたい たいせつな お金のはなし

藤野英人

10年間売れ続けるロングセラー
『投資家が「お金」よりも大切にしていること』の投資家が放つ

パパとママと未来のためのお金のガイドブック！

投資家がパパとママに伝えたい　たいせつなお金のはなし

藤野英人

星海社

248

SEIKAISHA
SHINSHO

100

はじめに

はじめに、お断りをしなければなりません。

この本は、子どもにマネーの知識を〝教える〟ための本ではありません。
子どもと一緒に、大人も学んでいくための本です。
教科書というより、ガイドブック。旅案内のような本だと思ってください。

ことの成り行きを説明します。

「子育て中のパパとママのためになる新しい〝お金の本〟を書いてくださいませんか?」

ある日、そんな相談を受けました。

僕は反射的に、今回はお断りをしないといけないかなと思いました。
なぜなら、ちょうど半年ほど前、『14歳の自分に伝えたい「お金の話」』（マガジンハウス）という本を出したばかりだったからです。
小学校高学年から高校生くらいまでを対象に、お金や仕事について考えるための本でした。

ちょっと気まずい思いを隠しながら、「実は子ども向けの本は出したばかりなので……」と説明をしかけた瞬間、編集者の岩間さんの目がパチッと開きました。
「今回は、もっと小さなお子さんを持つ方々にぜひ届けたいと思っています！」

小さなお子さん？　どのくらいですか⁇

「そうですね。幼稚園・保育園に通っている年長さんから小学校5年生くらいまで。お金に興味を持ち始めた子どもに、保護者の方がお金の使い方や経済、仕事について教えるための知識をいただける本。そんなイメージです」

聞けば、企画を提案してくださった岩間さんも4歳の女の子を育てるママなのだそうで、「実は、私も本当に困っているんです」とのこと。

へぇ、そうなんですか。どう困っているんですか？

「娘は生まれたときから電子マネーが身近にある環境で育っています。だからなのか、『お金を出さなくても無限に買い物ができる』と思っている節があるんです。そうではないと教えたいのですが、どう説明していいかわからなくて……」

ふむふむ、なるほど。

「それに、私たちが子どもの頃は、お年玉の使い道は『貯金する』のが王道でしたが、今は『貯蓄より投資』とも言われますよね。株式投資についても早くから教えたほうがいいのかなと思いながら、いつから、どんなふうに伝えるといいのか迷ってしまうんです。そ

もそも、正しく話せるか自信もないですし……。でも、わが子が将来困らないように、お金の知識はちゃんと備えてあげたいんです」

ほお、そういうことですか。

「ということで、藤野さんにぜひ幼い子どもへの〝教え方〟を教わりたいと思い、本の企画を考えました!」

僕には、あるひらめきがありました。

「いいですね。でも一つだけお願いがあります。まず、子どもたちにインタビューをさせてもらえませんか」

「子どもたちに、ですか? 親ではなく」

「そうです。子どもたちに取材をしましょう。彼・彼女たちが今どんな日常を送っていて、お金に関してどんなワクワクや疑問を持っているのか、まずはちゃんと知った上で、本の内容を考えたいのです」

僕の提案は受け入れられ、さっそく3組の親子とのオンラインインタビューの予定が組まれました。

その成果の詳細は本章に譲りますが、とにかく驚きの連続でした。

子どもたちは、僕たちが思いもしない視点で、世の中を見つめていました。そして、大変斬新な問いを僕に投げかけてくれました。

例えばこんな問いです。

「1万円札はどうしてこんなにキレイなの？」

「スマホにお金が入っているって本当？　あんなに小さいスマホにどうやって入れるの？」
「社長さんは一番エライのに、誰からお給料をもらっているの？」
「世界には困っている人がたくさんいるのに、どうしてお金をあげないの？」
どれもお金の本質を考えさせられる良問です。僕は何度もうなりました。そして、気づいたのです。
〝教える〟なんてとんでもない。むしろ、子どもたちから大人が〝教わる〟ことのほうが多いじゃないかと。
考えてみれば、それは当然のことでした。
インターネットや電子マネーなど、今の子どもたちにとって「あたりまえの風景」とな

っているものの多くは、大人たちが子どもだった頃には「なかった風景」ばかり。問いの前提が違うのです。

一方で、大人にとっての「あたりまえ」が、子どもにとっての「不思議」でもあるのだと、あらためて気づかされました。

例えば、お札に印刷されている細かな文字や模様について、「これは何？」「何が書かれているの？」と僕を質問攻めにする子どもがいました。

このとき、僕は財布から取り出した1枚の紙をまじまじと眺めながら「なんだろうねぇ」と繰り返すことしかできず、ある種の〝ショック〟を受けていました。

お金に深く関わる仕事を長くしていながら、僕はお金そのものを全然見ていなかったのだなぁというショックです。

そう、確かにあるのに、見えていなかった。あるいは、見ようとしていなかった。

子どもたちの問いによって、僕の目に映る風景はみるみる変わっていったのです。

ということで、この本のコンセプトは決まりました。
未就学児〜小学生から、お金について「教えてもらう」本です。
いや、子どもたちが正解を持っているわけではないので、「一緒に考えていく」と言ったほうがいいかもしれません。
これは、普段の僕の行動規範とも一致する、しっくりとくるコンセプトでした。

日頃から、僕は自分よりもうんと年下の若い人たちと積極的に出会い、語らう時間を大切にしています。
年齢は関係なく、同じ時代を生きる人はみな、「同時代人」。中でも若い人は「未来を生きる同時代人」であり、僕が長生きする限り、多くの時間を共に過ごせる仲間だと認識しています。

できるだけ若い人と出会って話を聞くことを心がけているのですが、さすがに3歳、4歳の子どもたちとは深い話を続けることができません。

共に話せる〝最年少〟世代となるのが、今回の本で対話した5〜10歳くらいの子どもたちではないでしょうか。

本の後半には、ひょんなことから僕の〝上司〟になった、中学生のレウォン社長との対話も登場します。

レウォン社長は、小学6年生で起業したスーパー事業家。彼との出会いについてのエピソードもまた、多くの人を元気づけるものだと思います。

そうそう、「では、藤野さん自身は、自分のお子さんとどんな話をしてきたの？」という疑問にお答えするために、社会人になったばかりの僕の娘との「ふり返り対談」も初めてトライしてみました。

レウォン社長や娘との会話からも、きっと一緒に学んでいけることがたくさんあると思います。

では、始めましょう。

目次

はじめに 3

第1章 子どもの目線から学ぼう！ 15

今の小学生に共通する「お金」の価値観 17

〈子どもの目線から学ぼうインタビュー1〉 21

小学2年生・はるかさん編
「お金には不思議がいっぱいあります」

〈子どもの目線から学ぼうインタビュー2〉 54

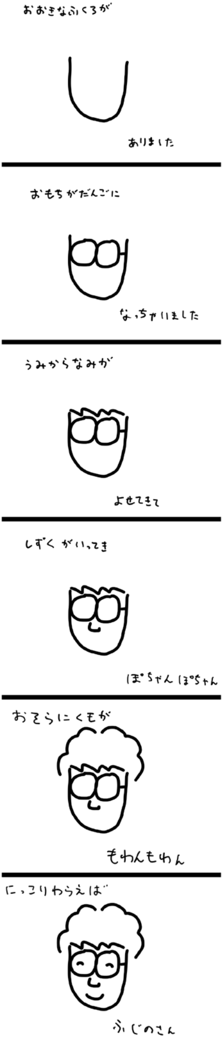
小学5年生・しょうたさん編
「ホワイトでもブラックでもない会社で、
年収500万円のプログラマーになりたいです」

〈子どもの目線から学ぼうインタビュー3〉 92
小学1年生・こうしろうさん編
「ケチって良いこと？　悪いこと？」

第2章 小学生で起業したレウォン社長から学ぶ 131

第3章 娘・菜々歩に聞く　投資家がわが子に伝えてきたこと 163

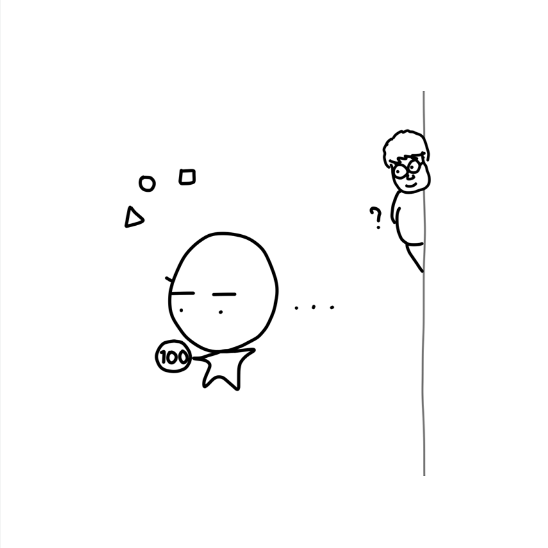
おわりに 185



イラストレーション　レウォン（polarewon）

第1章

子どもの目線から学ぼう！



これから3人の小学生との対話の様子を紹介します。
読んでいただくとわかるとおり、彼・彼女たちの目線は新鮮な気づきを僕たちに与えてくれます。

「自分たちが子どもの頃と比べると、ずいぶん変わった考え方をするなぁ」

そんな印象を受けるかもしれません。
でも、よくよく考えてみると、違いを感じるのは当然です。

今、10歳の子が生まれたのは10年前。その頃には、当たり前のようにインターネットがあり、スマートフォンがあり、電子マネーがありました。
今の大人たちが小学生の頃にはなかったものに囲まれて、今の子どもたちは暮らしている。
そもそも生まれた時点での環境が違うから、「お金」の価値観が違うのです。
まず、この前提を知ることから、大人たちは学ばないといけませんね。

子どもたちと対話をしながら、あらためて気づかされたポイントを簡単にまとめてみました。

今の小学生に共通する「お金」の価値観

1 「欲しいもの」はあまりない

大量生産・大量消費、さらに「不要な持ち物を手放そう」という「ミニマリスト」や「断捨離」の考え方がブームになるほど「ものが溢れた時代」に、今の子どもたちは生まれています。

生まれたときから暮らしに必要な衣食住は豊富に満たされているのが今の子どもたちの共通点です（もちろん、さまざまな事情で満たされていない子どもたちの問題もあります）。

また、少子化によって、一世帯あたりの子どもの数が減っていることから、昔の子ども

と比べると、祖父母や親戚からお年玉やおこづかいを多くもらっている子どもは多い傾向にあるようです。

小学5年生のしょうたさんのパパによると、「『クリスマスに何が欲しい？』と祖父母から聞かれても、『欲しいものは特にない』と答える」のだそうです。

「今、欲しいものは？」と聞いたときに、パッと即答する子どもは少ないのだということを、今回のインタビューでも実感しました。

2　でも、「お金」は大好き

今すぐ欲しいものは特にない。だからといって、今の子どもたちに欲がないわけではありません。

みんな、「お金は大好き」と迷いなく答えてくれました。面白いのは、お金を使って何かに替えるのではなく、「お金」そのものを所有することが好きなようです。

「ものを買おうとしたら、『お金がなくなるから嫌だ』と言ったり、『お金を手元に持っておきたいから、お年玉を銀行に預けたくない』と言ったりするんですよ」。あるお母さんは

そんなことを教えてくれました。

実はこの「お金が好き」という傾向は、日本の大人たちにも見られます。

お金を消費したり投資したりして手元から減らすことを嫌い、預貯金で貯めるのが大好き。「たくさんお金を残しておくことが、自分の身を守る」という価値観が根強いことは、日本国内に眠る個人資産が2000兆円を超えるというデータにも表れています（日銀の資金循環統計より）。

ただし、大人たちの感覚と異なる点として、子どもたちは純粋にお金の〝物質としての美しさ〟が好きなようです。「きれい」「カッコいい」「この模様はなんて描いてある？」といった言葉がよく聞かれました。

3　多様な「お金のカタチ」を受け入れている

〝物質〟としてのお金の美しさに惹かれる子どもたち。

それは「〝無形〟のお金」も身近な存在である今の時代に生きる子どもたちだからこその特徴かもしれません。

おそらく今の子どもたちの中には、「きっぷ」の買い方を知らない子も少なくないでしょう。交通系ＩＣカードやPayPayなど、電子決済で買い物をするシーンが日常に溢れ、また、新型コロナウイルス感染防止策として「非接触型の決済」が推奨されたことも影響を受け、お金そのものを触る機会が減っています。

そんな環境の中で育った子どもたちは、自然と「お金のカタチ」の多様性を受け入れています。「ビットコイン」「仮想通貨」に興味を持つ子どもも増えているようです。

一方で、「電子マネーが使えるお店と使えないお店があるのはちょっと困る」など、新しい決済方式が次々と生まれる中で起きている混乱を体感する声も聞かれました。

古いお金と新しいお金が入り混じる転換期の真っ只中を見つめている。まさにダイナミックな日常を、今の子どもたちは生きているのです。

君は、ジセダイ何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント
著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研
若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み
既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!